（続紙　１　）

京都大学	博士（経済学）	氏名	立石（横山）　和子
論文題目	国際公務員のキャリアデザイン―満足度に基づく実証分析―		

（論文内容の要旨）

本論文は、国連関係の国際公務員のキャリアを扱っており、国連関係の国際公務員の中で、特に日本出身者がどのようなキャリア形成を行っているかを論じる。この分野には、先行研究がほとんど存在しない。

本書の構成は、第一章で国際公務員という職種についての関心についての由来とキャリア研究の必要性を論じる。厳密な意味での国際公務員は国連機関に限定され、世銀はその範疇に入らないなど、研究対象としての国際公務員について論じるが、この職種についての基本的知識を持っていない読者に有益な情報が整理されている。

第二章では、国際公務員の人的資源管理制度について概説し、日本における人事制度と大きく異なることを示している。日本でのキャリア形成とはかなり異質であることから、日本での職業キャリアが国際公務員としてのキャリア形成に有効であるのかについての仮説が提示される。

第三章は、質問紙調査によって国際公務員にいたるキャリアパスが分析される。学歴に加えて、職歴としてどのようなものが多いか、また、現在の職業キャリアに対する満足が測定される。国際公務員の待遇は、昇進することによってかなり高くなるが、日本の国内でのキャリアと対比した満足が問題とされる。

第四章は、第三章における調査の因果的分析である。満足を決定する要因がどのようなものであるのかを重回帰分析などを用いて行っている。キャリアについての満足は、仕事の内容についての満足に裏付けられているという結果が示されている。また、満足についての因子分析が行われ、男性職員と女性職員では満足の構造が異なることが示された。基本的に男女では、職務内容についての満足の構造が異なり、待遇についての満足と職務内容についての満足のそれぞれについての重視の程度が異なっていることが示される。また、基本的には女性の方が国際機関勤務への満足が高いことが示された。

第五章では、このような日本人国際公務員に対して、日本人以外の国際公務員のキャリアパターン・キャリア意識との対比が行われる。一般に外国出身者は国際公務員になるというキャリア選択が日本人よりも早期になされ、そのための準備が開始されている点が明らかにされた。

第六章では日本人国際公務員への聞き取り調査の報告がなされる。聞き取りの中心は、職種ごとに、あるいはキャリアごとに満足の構造と国際公務員としての働き方がどのように異なるかという点にある。第七章では本論文のまとめとして、ここまでの議論の整理が行われ、国際公務員という職種がどのような意味を持つかを再度まとめている。さらに、この研究以降の課題を摘出する。

また、付録として、聞き取り調査の記録が付されている。この記録は、掲載許可を得た対象者に限定されたもので、調査総数からはかなり少なくなっているものの、それでも、かなりの程度、日本人国際公務員についての情報を伝えるもので、価値ある記録である。

（続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

本論文の評価は何よりもまず、国際公務員という職種についての研究を行ったことにある。これまで国際公務員という職種についての研究は国内ではほとんど皆無であるといってよい。さらに、国際公務員という職種が今後、量的にも質的にも重要性を増すことが予想されているだけに、それを研究する嚆矢であるという点は高く評価されてよい。

また、国際公務員の研究に当たって、それをキャリアという側面から捉えるという点でも高く評価されなければならない。国際公務員は国連に関連する機関の職員として、国家間の利害を調整し、人類全体に貢献するという職責を果たすことが期待されるという意味で高い使命感を要請されると共に、現実に働く者にとっては一つの職業であり、職業生活が成立しなければならない。この視点は、実際に国際公務員の経験を持っているばかりではなく、国際公務員を送り出す業務に携わっているという経験を持つ著者ならではの視点であり、国際公務員のキャリア満足を論じることは余人には困難であったといえる。

さらに、この研究を完成させるために、対象となる日本出身者・外国出身者に対して十年あまりにわたって克明にデータを収集していることも評価しなければならない。実際、調査対象となる国際公務員は決して多いわけではなく、人脈を通して聞き取り調査を依頼するなど、極めて情報収集に難渋したと思われる。巻末の聞き取り調査の記録は、その意味で非常に貴重な情報であり、これを記録し、掲載したことは本論文の構成部分として特筆すべきであるといってよい。この点は、本研究に続く研究者にとって重要な指針を与えるといってよい。

しかしながら、いくつかの課題が本論文にはある。自分の実務経験から導かれたいくつかの知見や仮説について論じており、それらの結論は極めて妥当なものではあるが、その結論にいたる質問紙調査のデータの扱いや、聞き取りにおける発言からの見いだされた事実から結論にいたる論理的展開が十分なものではない。緻密に事実を積み上げて論理展開を行わなければいけないところを、反証がなされないというレベルで論証が済まされているケースがある。この理由は､実務経験に裏打ちされた思考がこの場合には思い込みとなって現れているといってよい。個別の命題の前提や結論自体は妥当なものであるだけにこの点は非常に残念である。自己の経験を相対化して、一般的な議論として拡張することが社会科学に求められているだけに、この点について学位の認定に当たって慎重に検討すべきであるとする問題意識を持って委員間で、かなりの討議を重ねた。

しかし、本研究の社会的意義はきわめて大きく、すでにも学会内での評価も確立している。これらを総合して学位を認定すべきであるという結論に達した。日本人の国際公務員数が日本の基金拠出に応じて割り当てられる職員枠を下回り、国際公務員を養成することが必要とされている中で、キャリアとしての国際公務員を取り上げて、それに応募する若者をリクルートするためにも本論文は価値があるといえる。国際公務員が出身国の国益を主張しないまでも、それを損ねないように行動する機能を持っていることも明らかであり、日本出身の国際公務員の必要性は今後ますます高まるといってよい。日本社会の将来にとって貢献する可能性を持つ研究である点に大きな意義を見いだしてよい。

以上のような評価に基づき、本論文を博士（ 経済学）　の学位論文として価値あるものと認める。

なお、平成２３ 年１　月２０ 日論文内容と、それに関連した試問を行い、合格と認めた。

様式 4（論文博士用）

学 識 確 認 の た め の 試 問 の 結 果

氏　　名　　立石（横山）和子

（試問の科目・方法・結果）

	（科目）	（方法）	（結果）	（備考）
専攻学術				
	人的資源管理	口頭	合格	
	経営組織	口頭	合格	
	国際協力組織論	口頭	合格	
外国語				
	英語	口頭	合格	
	フランス語	口頭	合格	

（試問の結果の要旨）

上記のとおり、専攻学術および外国語の学力に関する試問の結果、本大学院博士課程を修了したものと同等以上の学力を有することを確認した。

平成24年5月16日

試問担当者氏名　日置　弘一郎
久本　憲夫
石水　喜夫